© 発行 中京大学
〒466-8666
名古屋市昭和区八事本町101-2
■中京大学スポーツ編集局
（スポーツ振興室内）
TEL 0565-46-6935
http://www.chukyo-u.ac.jp

中京大学スポーツ

学術とスポーツの真剣味の殿堂たれ

60th Anniversary 2014

2013（平成25）年
7月29日
第4号

室伏准教授　棒高跳び山本聖途選手を激励

攻めの姿勢で世界陸上出場

山本選手（左）に助言する室伏准教授

日本を代表するトップアスリート、ハンマー投げの室伏広治・スポーツ科学部准教授が、陸上の世界選手権モスクワ大会（8月10―18日）に出場する棒高跳びの山本聖途選手（体育4、岡崎城西）と中京大学で6月末に対談した。室伏准教授は、山本選手の勝負強さを評価したうえ、「自分の力を出し切ることに集中してもらいたい」と激励した。山本選手は「攻めの勝負をしたい」と、大会本番での活躍を誓っていた。《関連記事2面》

室伏准教授「自分の力出し切れ」
山本選手「挑む気持ちで勝負」

山本選手は、今年6月の日本選手権で、5㍍70をただ一人成功して2連覇し、世界陸上出場を決めた。昨年の日本選手権では、ジャンプオフ（順位決定戦）の末、第一人者の澤野大地選手を退け、ロンドン五輪に出場している。室伏准教授は、3時間余に及んだ雨中の激闘を試合をしながら見ていた。「悪条件の中でよく頑張った。コンディションを整え、気持ちが折れないよう維持するのも大変だったと思う。その精神的なバトルを制し、勝負強さを証明した。自信になったと思います」と、山本選手の精神力を褒めた。

山本選手は「昨年の日本選手権は、勝ててしまった、という感じでしたが、今年はしっかり力をつけて勝ちに行き、世界選手権の切符を取りに行きました」と、今回の世界陸上代表は狙ったものと明かした。

室伏准教授は2004年アテネ五輪、11年テグ世界陸上で金メダルを獲得、日本選手権は19連覇の偉業を達成している。そうした経験を踏まえ、本番に向けて「当然目指すからには、守りに入るのではなく、今まで通りの自分のベストを尽くしてほしい。自分の力を出し切ることに集中してもらいたい」と助言。「私の場合、調整が間に合えば出場します。出るからには力を出し切りたい」とも話した。

山本選手は「昨年は五輪出場が決まった時点でほっとして守りに入った部分があった。（予選落ちしたロンドン五輪は）全然試合になりませんでした。今年はその反省を生かして、攻めの勝負、挑む気持ちでいきたい」と決意を示した。

世界の舞台で戦う意義について、室伏准教授は「オリンピックや世界選手権に出場するのは大変なことです。もちろん、同じ位の力を持つライバルは世界に沢山います。そこにチャレンジして、勝ったり、負けたりして精神的にも揉まれながら、勝つためのセオリーを自分でつかむことが必要です」と強調した。

さらに、学生アスリートの取り組み姿勢について、「当たり前のことですけど、正しい練習をして、正しい技術を学び、正しい結果を導き出すこと。何か問題がある時は、常にフィードバックして、コーチや他の人の目を大事にすることです」と話した。また、「山本選手は、今はいいレールに乗っています。（指導する）島田正次コーチは、何かあったら、怒鳴ってでも審判に抗議してくれる心強いコーチです。あとは中京大のみんなが応援してくれる」と、大会での活躍を期待した。

中京大学のスポーツ情報　大学ＨＰの「スポーツ」（http://sports.chukyo-u.ac.jp/）、facebook「スポーツ振興室」（左下ＱＲコード）で紹介しています。
「中京大学スポーツ」に関するご意見は、スポーツ振興室（sports@mng.chukyo-u.ac.jp）へお寄せください。

ユニバーシアードに6人

山本選手「平常心」の銀

400㍍リレーで第3走者に抜擢
400㍍自由形日高選手は銅

2年に1回の「ユニバーシアード夏季大会」がロシア・カザニで開催され、陸上競技（7月7―12日）と水泳（7月10―17日）に、本学の現役学生6人が初出場した。

陸上では、棒高跳びの山本聖途選手＝写真上＝が、向かい風の中、5㍍60の記録で銀メダルを獲得した。山本選手は「程好い緊張と平常心を持って、自分のペースで試合でき、自信になりました」と世界陸上への手応えをつかんでいた。

短距離の与那国塁選手（スポーツ科2、那覇西）は、100㍍は2次予選敗退だが、400㍍リレーで第3走者に抜擢され、銀メダル。「次のユニバにも出たい。そのためには日本選手権でトップを狙いたい」と話した。長距離の荘司麻衣選手（スポーツ科2、岡崎学園）は、1万㍍、5000㍍ともに4位。「表彰台を目指していたので悔しい。2年後のユニバでは優勝したい」と、それぞれ新たな目標を掲げていた。

水泳は、自由形の日高郁弥選手（スポーツ科2、佐賀学園）が400㍍で銅メダル。200㍍、800㍍とも6位だったが、800㍍フリーリレーで4位となった。50㍍背泳ぎの長谷川純矢選手（スポーツ科2、島田）は8位入賞、佐野夏菜選手（体育4、城南静岡）は100㍍平泳ぎで準決勝敗退だった。

400㍍自由形で銅メダルの日高選手（競技写真は「フォート・キシモト」提供）

100背泳ぎ金　白井選手

また、本学OBの白井裕樹選手（2011年度体育卒、ミズノ）が、100㍍背泳ぎで自己ベストを更新する53秒70で金メダル、200㍍背泳ぎでも銀メダルを獲得した。400㍍メドレーリレーにも出場し、銀メダルとなった。

怪我から復帰までサポート
「CISP」を大幅強化

専属トレーナー２人

専属トレーナーの指導を受ける選手たち

米国AP社のトレーニング技術を導入した中京大学の学生アスリート支援事業「CISP」で、今年度から新たに2人の専属スタッフが配置され、選手たちのサポート体制が強化された。

2人はともに、米国で大学院修士課程を修了し、国家資格のアスレティックトレーナー（ATC）を取得、AP社でのインターン経験がある。1人は怪我から復帰するためのリハビリや怪我の予防を担当、もう1人は競技力向上につながる体の動きを身につけるトレーニングを指導する。互いに連携することで、選手が故障せずに練習を続けられる環境をつくる。

また、清水卓也・保健センター長とも連携し、怪我から競技復帰までの一連のサポート体制を学内で確立する。

CISPは過去2年間、委託契約を結んでいるAP社のパフォーマンススペシャリスト、咲花正弥氏、阿部勝彦氏による年4回の直接指導を受けてきた。新体制に伴い、両氏の指導に加え、常時、トレーニング指導を実践できる体制が整った。

今後、運営システムの構築や対象選手の拡大、CISPプログラムを体育会クラブに普及するセミナーの開催なども検討していく。

室伏准教授　山本選手
怪我せず継続して練習を
腰回り強化で力強い走り

室伏広治・スポーツ科学部准教授がディレクターを務める「CISP」のトレーニングは、学生アスリートの競技力向上に効果が表れ始めている。中でも、棒高跳びの山本聖途選手は、ロンドン五輪出場後の昨年秋から取り入れ、世界選手権の出場権を獲得する原動力の一つとなった。室伏准教授は、山本選手との対談で、トレーニングの重要性を説いた。《本文記事１面》

CISP 競技力向上に効果

山本選手と対談する室伏准教授（左）

山本選手は「昨年より体重が3キロ増えたことと、主に腰回りを中心に体幹を強化したことで、走りが力強くなった。ポールを持って走っている時に体がぶれなくなり、踏み切り時の突っ込み動作のズレがなくなりました」と、トレーニングの効果を実感している。

1年弱で好結果が出たことに、室伏准教授は「跳ぶ時の体のブレがなくなったことは、間違いなく記録に結び付いていくでしょう。体が一つのユニット、塊となっていくことが大事です。バラバラに突っ込んでは反発をうまく利用できない」と解説した。

山本選手は、試合当日のアップや試技の待ち時間にも、体幹トレーニングを取り入れている。室伏准教授は「試技を待つ間に、筋肉を温めてほぐし、リラックスすることも、ベストパフォーマンスをするために大事です。自分のパターンを作らないといけない」と助言した。

CISPのトレーニングは、怪我をしない体づくりも柱となっており、「何よりも怪我をしない選手になってもらいたい。怪我をせず、継続して練習できれば、どこかで世界で勝つチャンスが来る。怪我や違和感があると、思い切って走れない。試合に向けては、不安要素を抱えないことが大事です」と、アスリートの心得を話した。

室伏准教授は「まだ伸びる要素は沢山ある。強くなると同時に、柔軟性も必要になってくる。これは世界選手権の後、次のオリンピックに向けての課題になってくる」と指摘した。

山本選手は「やはり力が付いた分、ポールが硬く、重くなるので、体にかかる負担が大きくなります。それに耐えられる力や柔軟性が必要だと思います」と、さらなるレベルアップを誓っていた。

日本選手権で予選を走る安部選手

400H 再び世界陸上
安部選手復調「最高の走りしたい」

400㍍ハードルの安部孝駿選手（体育4、玉野光南）が復調し、再び世界に挑む。怪我で練習不足だった昨年の日本選手権で、ロンドン五輪代表を逃してから1年。悔しさをバネに成長を遂げ、6月の日本選手権でモスクワ世界陸上の出場を決めた。「最高の走りをしたい」。身長1㍍91の大型ハードラーは、2年前のテグ大会に続く世界陸上に気合十分だ。

五輪を目指した昨年の日本選手権は、4位にとどまり、五輪代表に届かなかった。試合前に膝を痛め、十分な調整ができていなかった。加えて、「先行したい」という気持ちが強過ぎ、落ち着いたレース運びができなかった。何よりも、周囲の期待に応えられなかったことが悔しかった。

一時は「このまま駄目か」と自信を失いかけた。しかし、コーチや周りに支えられ、自分の力を信じて練習を再開。国立スポーツ科学センターでリハビリを行い、以前よりも体のケアに気を配るようになった。

今年に入り、走りを変えた。ハードル間の歩数を「15歩だと話まってブレーキがかかる」と感じ、14歩の区間を増やした。勇気のいる決断だった。思うような走りにならず、迷った時期もあったが、「進歩しないといけない」と新しい走りを身につけてきた。

春先に右足の肉離れを起こし、今年も練習不十分だったが、走りの改革を貫き、世界陸上代表の座をつかんだ。自己ベストは、2010年世界ジュニア2位で記録した49秒46。この1年間の経験で、記録はいつでも塗り替えられるという自信を持った。

万全の状態でスタートラインに立てば、決勝進出も可能だ。「日本代表として世界と戦っていきたい」。アスリートの試練を乗り越え、安部選手は8月12日、世界陸上の予選に臨む。（現代社会3　松本彩花）

先輩NOW

大磯プリンスホテル支配人
原　千明さん
「温かハート」水泳で学ぶ

原千明さん　1985年中京大学体育学部卒。50歳。中京高校（現・中京大中京）、中京大学時代に水泳部で活躍。卒業後、西武グループのプリンスホテル入社。東京、大磯、鎌倉の各ホテルで主に営業を担当し、箱根、蒲郡の支配人を経て、2007年から大磯支配人。

「相手の立場に立って物事を考える」。原さんは、学生時代の恩師、鶴峯治・元水泳部監督から教えられたこの言葉を大切な財産にしている。相模湾を一望する大磯プリンスホテル（神奈川県大磯町）の責任者として、顧客の立場に立つ「温かなハートでつくる優しい大磯」を合言葉にし、従業員200人と接客にあたっている。

横浜市網島の出身。幼いころ体が弱く、「逆療法」で小学2年からスイミングスクールに通い始めた。5年生からは選手コースに昇格。高校は当時日本一だった広島県の尾道高校に進んだ。高校1年の時、水泳部監督だった鶴峯さんが、学校との方針の違いから、中京大学に移り、原さんら多くの選手も中京高校（現・中京大中京）に転校、中京大に進学した。

高校2年の夏休み、友人と大磯ロングビーチに行き、「大勢の人が本当に楽しそうに遊んでいる姿に、カルチャーショックを受けた」。辛い練習の場が楽しみの場になっていた。「将来はこういう施設で仕事がしたい」と漠然と感じた。

大学2年の時はレギュラーから外れ、挫折を味わった。しかし、4年生でインカレに出場し、メドレーリレー予選のバタフライで自己ベストを出した。「挫折はできるだけ若い時に経験するといい」。立ち直る機会を持つことは人生にプラスになる。

プリンスホテルに入社して2年半後、大磯ロングビーチで営業を担当した。室内プールを持たない隣町の東海大水泳部の指導を頼まれ、職場のプールでコーチと監督を6年務めた。「実践的なコーチング」を経験し、「（練習でも仕事でも）人は自らやろうとしない限り身につかない」と学んだ。

「これは、今も私のマネジメントの役に立っています」。原さんは、水泳を通じて多くを学び、仕事に生かしている。

春季 ハンドボール、ソフトボール アベック優勝達成

今年の東海地区の春季リーグは、ハンドボールとソフトボール部が男女ともに優勝するなど、好成績を収めている。陸上競技部や水泳部が個人競技で国際大会に代表選手を送り出す一方で、団体競技は東海地区をトップで突破し、西日本大会、全国大会へと駒を進めるクラブが目立っている。

3季連続完全優勝の女子ハンドボール部。大同大戦でシュートを放つ近藤保乃佳選手（現代社会2　吉田梨花子撮影）

準硬式3季連続で優勝

アベック優勝したハンドボール部は、男子が中野創介主将（体育4、愛知）、小塩豪紀選手（体育4、東海南）らが活躍し、3季連続優勝。女子も、平井花波主将（体育4、星城）、近藤保乃佳選手（体育4、八日市）を中心に堅守速攻で3季連続の完全優勝、東海で圧倒的な強さを示した。

また、準硬式野球部は春季リーグ10戦全勝で3季連続の優勝を勝ち取った。8月下旬に東京で行われる全日本インカレで9度目の全国制覇を狙っている。

西日本インカレでの活躍も相次いでいる。

男子バスケットボール部は、ノーシードから勝ち上がり、3位となった。

女子バレーボール部は、エース川島里華選手（体育4、九州文化学園）を中心に、1セットも落とさない完全制覇を2季連続で達成し、西日本インカレに臨んだが、ベスト8にとどまった。

西日本インカレが地元豊田市で開催されたのが、体操競技と新体操。体操競技部は女子が団体総合2位、前田早知子選手（スポーツ科3、名古屋経済大市邨）が個人総合2位。新体操部は女子が団体総合3位、男子個人総合で臼井優華選手（スポーツ科1、済美）が優勝した。

新体操個人総合　臼井選手制す

新体操西日本インカレで個人総合優勝した臼井選手

軟式庭球　王座戦男女準V

ソフトテニス部は、6月の全日本大学王座決定戦で、男女そろって準優勝した。ともに決勝で早稲田大に敗れ、男子は惜しくも2連覇を逃したが、女子は初の決勝トーナメント進出だった。

女子準優勝の原動力となったのは、ダブルスの佐々木遥選手（体育4、和歌山信愛女子短大附）と大楫朝加選手（スポーツ科3、三重）。ペアを組んで3年目となり、息もぴったり。佐々木選手は「昨年の男子優勝を見て、興奮とともに（決勝に残れなかった）悔しさを感じました。その気持ちを切らさず、決勝まで勝ち進みました」と、男子の活躍が発奮材料になったという。

佐々木・大楫ペアは、王座戦に続く西日本学生選手権で見事に優勝を果たした。8月2日から山形県で開催される全日本インカレが二人の集大成の大会となる。

王座戦決勝で奮闘した佐々木選手（手前）と大楫選手

女子ソフト東アジア大会　長谷川・塚本選手　活躍

ソフトボール東アジアカップ女子大会が7月5―7日、岐阜県揖斐川町で開催され、中京大学女子ソフトボール部の塚本智名外野手（スポーツ科3、水口）と長谷川朋子投手（体育4、浜松市立）の2人が、大学日本代表チームで見事な活躍を見せた。

長谷川投手は中国戦で五回を投げ、勝利投手となったほか、台湾戦、日本代表戦にも登板し、要所を締める投球を見せた。

塚本選手は韓国戦も含め全4試合に1番中堅で出場。日本代表のエース、上野由岐子投手から2安打を放つなど、計11打数5安打3打点の活躍で、優秀選手に選ばれた。

大学日本代表は、初参加の日本代表に1対0で惜敗し、3勝1敗だった。昨年は大会MVPだった塚本選手は、日本代表との初対戦に、「勝ちたかった。でも、上野投手の変化球はこれまで見たことがない球で、すごかった。いい経験になりました」と話していた。

大会で優秀選手に選ばれた塚本選手の打撃（右）と力投する長谷川投手（ともに現代社会1　池尾和哉撮影）

学生アスリート 中学部活を指導

文科省委託事業　地域貢献に14人協力

中学バレーの指導をするスポーツ科学部2年の大槻沙弥さん（総合政策2　岡本泰輔撮影）

中京大学の学生アスリートらが、地域スポーツを支援する文部科学省委託事業に協力、豊田市内の中学校の部活指導を今年5月から始めている。

この事業は、トップアスリートの優秀な技術や経験を地域スポーツの普及に役立てるのを目的にしている。NPO法人朝日丘スポーツクラブ（豊田市）が、文科省の「地域スポーツとトップスポーツの好循環推進プロジェクト」を今年度受託し、アスリートと中学校の仲介役となって運営している。

中京大学は、スポーツによる地域貢献の一環として、朝日丘スポーツクラブと連携し事業を推進している。中学生を指導するアスリート15人のうち、中京大学関係者は14人。五輪3回出場の青戸慎司・短距離コーチら陸上競技部OB4人をはじめ、男子のハンドボールとバスケットボール、女子のバレーボールとソフトボール各部の選手10人が参加している。学生は教員志望が多く、子供たちを指導する経験を将来生かせるメリットがある。

対象は、希望のあった豊田市内の中学校10校の部活動。月3、4回の巡回指導がすでに始まっており、生徒たちは現役選手たちの高い技術に触れ、スポーツの楽しさや素晴らしさを感じる機会となっている。

朝日丘スポーツクラブは、小学生向けスポーツフェスティバル（9月14日、10月14日、スカイホール豊田）、部活動指導者向けの研修会を8、11月に計画しており、学生アスリートらが指導することになっている。

先生に聞こう

理論から実践へ　翻訳してみよう

回答者　近藤良享・スポーツ科学部教授（スポーツ倫理学）

質問　私は競技力向上を目指してスポーツ科学部に入学しましたが、講義で学んだことはどう実践とつながるのでしょうか。（スポーツ科学部1年　山口紗也加さん）

スポーツ科学部の授業には理論（講義、演習）が数多くある。自分の専門種目の競技力を高めようと意気込んできた割に、座学が多くてついつい眠気を誘うかもしれない。しかし、スポーツ科学部で学ぶ理論は、多くの先人たちの英知が文章化され、客観的に伝達可能なように引き継がれている遺産である。

スポーツ科学部で学ぶ理論は、どの競技、どの選手にも当てはまる一般論である。一般論は、少し工夫をして自分の競技に翻訳しないと応用できない。

走り方の一般論は、自分の走り方とは全く同じではない。当てはまるところと、当てはまらないところが明らかにできれば、走り方が分かったことになる（技術化）。

自分でできるだけでなく（技能化）、他の人に説明できるためには分からなければならない。分かってできれば、今度は人に伝えることができる（指導技術）。

また、走り方という基本運動ではなく、他のスポーツ種目の技術と相互交流できれば、創造的なプレーの開発につながる。

例えば、サッカーの本田圭佑選手の無回転シュートや落ちるボールの軌道は、他のボール種目にはなかったのだろうか。マンガの世界ではもう相当前に「木の葉落とし」（バレーボール）が創造されていた。それらの類似性、差異性を想像しつつ、自分だけの創造的プレーをつくりだそう。

このように、自分の競技と理論系の講義とを連結させ、いつも自分の競技に翻訳してみるという習慣ができれば、毎日の講義も楽しくなるし、競技力も向上して一石二鳥である。

硬式野球 復帰「即V」狙う

秋季１部リーグ９月７日開幕戦

硬式野球部は、愛知大学野球の秋季リーグ戦から1部に復帰する。1部に戻るのは、2010年の春季以来7季ぶり。2部にいた3年間、着実にチーム力を高めてきた。過去に1部で33回優勝の伝統を誇るチームは、「復帰即優勝。明治神宮大会出場」を目標に掲げる。9月7日、名古屋市の瑞穂球場で秋季リーグ開幕戦に臨む。

応援に行こう

愛知大学野球の秋季１部リーグ開幕戦は、中京大と春季１部優勝の愛知大が、９月７日（土）午前10時から、瑞穂球場で対戦する予定。翌８日（日）も午後１時から瑞穂球場で愛知大戦が予定されている。

中京大は第２週の９月14日（土）、15日（日）は愛知学院大戦、第３週の９月21日（土）、22日（日）は名城大戦となる見込み。詳細は、愛知大学野球連盟が正式決定後に公式サイトで紹介される。

４年生左腕　清水選手「全力を尽くす」

秋季１部リーグで活躍が期待される清水翔太投手（現代社会２　岩月美奈撮影）

この秋が最終シーズンとなる4年生のリーグ戦にかける思いは強い。山中渉伍主将（体育4、中京大中京）は入学してすぐの春季リーグで首位打者という輝きを見せたが、1部はそのシーズン限り。エース清水翔太投手（体育4、麗澤瑞浪）も1部を経験したものの、「その時は敗戦処理。本格的に1部のマウンドに立つのは初めて」と開幕に照準を合わせている。

春季リーグで1部昇格の原動力になった、大野晋平選手（スポーツ科3、北大津）、岡部直人投手（スポーツ科2、いなべ総合学園）、鈴木孝幸選手（スポーツ科2、浜松市立）ら3年生以下の選手にとっては、1部は初めての舞台。

チームは、清水、岡部の両左腕を軸にした守りに重点を置いてきた。懸念材料だった攻撃力も、「今年は全体的に打力がアップし、逆転できる力をつけた」と、半田卓也監督は見る。実際、春季リーグでは、打のヒーローが日替わりで現れ、2部優勝決定戦や1部との入れ替え戦を含め13試合のうち、8試合で逆転勝ちしてきた。ただ、逆転が多いのは、リードを許しているということでもある。清水投手は「コースを狙いすぎて歩かせてしまい、それが失点につながることもあった」と春季の課題を振り返る。

半田監督は「一人ひとりが自分の役割を理解し、それを果たすことができるようになってきたが、1部は甘くない。さらにレベルアップが必要」と表情を引き締める。そのカギを握るのが、清水投手の左腕であることは間違いない。清水投手は、卒業後は社会人野球に進むことが決まっており、「今後の野球人生のためにも全力を尽くす。明治神宮大会にも行くつもり」と決意し、半田監督は「1部でも十分通用する力を持っているので、自信を持って投げてほしい」と期待している。

村上ゼミ　瑞穂で調査第２弾

中京大学のスポーツを盛り上げる「応援プロジェクト」の一環で、現代社会学部の村上隆教授のゼミが、本学硬式野球部が出場する9月開幕の愛知大学野球秋季1部リーグ戦で、瑞穂球場の来場者に、アンケートを実施する。

村上ゼミは、今年3月に豊田スタジアムで開催された中京大と明治大のサッカー交流戦で、来場者にアンケートしており、調査第2弾となる。「応援プロジェクト」では、有力大学との対抗戦の設定や応援方法などを検討しており、村上ゼミは来場者に大学スポーツへの関心度などを調べ、基礎資料とする。

村上ゼミは、ナゴヤドームの来場者アンケートを基に集客策を提言する「ドラゴンズ・プロジェクト」を継続している実績がある。3月の豊田スタジアム調査では、観客564人の回答を得て、対抗戦などのイベントへの参加希望が85%に上ることなどを明らかにしている。

サッカー快進撃続く

総理大臣杯、天皇杯　真夏の正念場

東海学園大戦で競り合う加藤選手

サッカー部は、東海学生選手権、愛知学生選手権で5月に連続優勝し、東海学生リーグも前期を首位で折り返す快進撃を続けている。

東海リーグ前期は8勝1分の負けなし。守りが堅く、失点はわずかに4。2位の東海学園大より6点少ない。昨年に比べ、セットプレーでの失点が大幅に減った。「より攻撃に人数をかけたい」（朝倉吉彦監督）と、FW3人の攻撃的な陣形を採用。FWの加藤翼選手（スポーツ科2、中京大中京）、途中出場が多い畑直樹選手（体育4、静岡科学技術）が、ともにリーグ3位となる7得点を挙げている。

トップチームの20人は、ユース経験者が多く、1、2年生も戦力になっている。リーグ戦で故障者が数人出たが、「だれが出場しても戦い方は変わらない」（朝倉監督）と、チーム力を高めた成果が出ている。

東海リーグは年末の大学選手権（インカレ）につながるが、8月には二つの大会がある。

東海学生選手権優勝で出場権を得た「第37回総理大臣杯全日本大学トーナメント」は、8月11日の2回戦（午後6時、大阪長居第2陸上競技場）で、早稲田大・桃山学院大の勝者と戦う。天皇杯愛知県代表を決める大学、社会人4チームのトーナメントも、愛知学生選手権優勝で出場を決めており、8月18日の準決勝（午後6時、豊田市運動公園球技場）で社会人のFC刈谷と対戦する。

関東、関西の強豪と対戦する総理大臣杯では、相手にボールを支配される可能性もある。朝倉監督は「相手を0点に抑えれば勝てる。点を入れさせないようにする」と守りを一層重視する。

DFの福ヶ迫知秀選手（体育4、中京大中京）は「1年生の時に総理大臣杯やインカレで準優勝したのを見ているので、決勝の舞台でみんなと優勝の喜びを分かち合いたい」と話す。

愛知大学選手権MVPのFW南部建造選手（スポーツ科3、第一学院）も「東海リーグと総理大臣杯とではレベルが違う。調子を上げて、目の前の1試合ごとに全力で臨みます」と、それぞれ決意を胸に秘めている。

（現代社会3　山田翔子）

Chukyo's COACH

男子バレー部　青山繁監督

自主性尊重 そつがないプレーを

青山繁監督（あおやま・しげる）　名古屋市出身。バレーボールは中学１年から始め、中京高（現中京大中京高）３年で高校選抜。法政大学時代に全日本インカレ優勝（ＭＶＰ）。富士フイルムに入社した1992年にバルセロナ五輪代表。世界選手権に２回、ワールドカップに３回出場した。東レに移籍後もＶリーグで活躍、2006年黒鷲旗全日本選手権優勝を最後に現役引退。09年に中京大学職員となり、男子バレーボール部コーチ、翌年から監督に就任。好きな言葉は「平常心」。

「指導者はヒントを与え、選手はそれを自分でアレンジしてプレーを作っていくのが大学生だと思う」

青山監督は、選手が自ら考え、正しく行動する「自主性」を大切にしている。方向が間違っていれば指摘するが、練習でも1回のミスでは言わない。2、3回同じミスを繰り返した時にアドバイスしている。

試合中は「伸び伸びとやってほしい」と、戦術を伝えるだけにとどめている。もっとも、「自主性」を身勝手な「自由」とはき違えた選手には厳しく指導する。

青山監督は身長1㍍87。現役時代、レシーブからスパイクまで変幻自在な天才肌の選手だった。2㍍級の海外選手を相手にしてきた経験から、「強打のスパイクでも、ブロックアウトでも、フェイントで決めても、1点の重みは変わらない」が信条だ。

選手たちは青山監督より背が低く、徹底してレシーブを磨いている。長身の選手に上から攻撃されても、拾いまくってつなぎ、相手のすきを突く「細かくそつがないバレー」を目指している。監督になって3年目。旧知の先輩指導者から「青山君のチームになってきたね」と声を掛けられた。

学生の人間形成も大切な使命だと考えている。「大学を卒業後、社会人として挨拶や受け答えができ、礼儀正しい人間になってほしい」。毎年、古巣東レの合宿に選手を連れて行き、感謝の気持ちや社会常識を身につけさせている。

「とにかくバレーボールを上達させて、勝つ喜びを与えてあげたい」。試合では熱くなり、選手と一緒に喜ぶ。と同時に、次の戦術を即座に指揮できるよう、冷静さを保つようにしている。今年度のモットーは「明るく、楽しく、元気よく」だ。青山イズムがチームに浸透してきている。

（現代社会3　金原優香）